1965……1974

陣馬形登山マラソン（昭和40年）

飯島側より旧飯沼橋を望む（昭和47年）

建設中の国道153号、中央地区付近（昭和42年）

建設中の小渋ダム（昭和41年）

昭和40年代 1965～1974

広域インフラ整備と過疎化の進展

昭和40年代に入ると、三六災を乗り越え本格的な村づくりへの取り組みが始まった。しかし日本の高度経済成長期は人口の大都市集中が進み、村の人口流出が始まり過疎化が進展した時代でもあった。村の人口は昭和40（1965）年に6727人、昭和49年には5581人と発足当初の66％まで減少した。昭和45年、過疎地域対策緊急措置法による「過疎地域」指定を受け、村は基盤づくりに全力を注ぐこととなった。

昭和30年代から進められていた「南向村誌」「片桐村誌」が昭和41年に発刊。翌昭和42年には福祉センターが完成した。

昭和43年10月、国道153号牧ヶ原トンネル工事が着工となり翌年に貫通した。これにより国道が背骨のように村を南北に通ることとなった。昭和44年には小渋ダムも完成。続いて小渋湖温泉が完成し貴重な観光資源となった。しかしダム工事に伴い桑原地区の約3分の2にあたる35戸が水没したことも忘れてはならない史実である。昭和46年には陣馬形山に牧場が整備され、夏場には牛が放牧されるようになった。

過疎対策の一環として昭和46年5月、県下で初めて村営バスの運行が始まった。現在の巡回バスにつながる特筆すべき事業である。さらに合併当初からの懸案であった統合中学校問題は、昭和48年に建設位置を牧ヶ原地籍に決定し着工となった。村営水道の建設も翌年から始まった。

昭和50～60年代 1975～1988

生活基盤の整備が進む

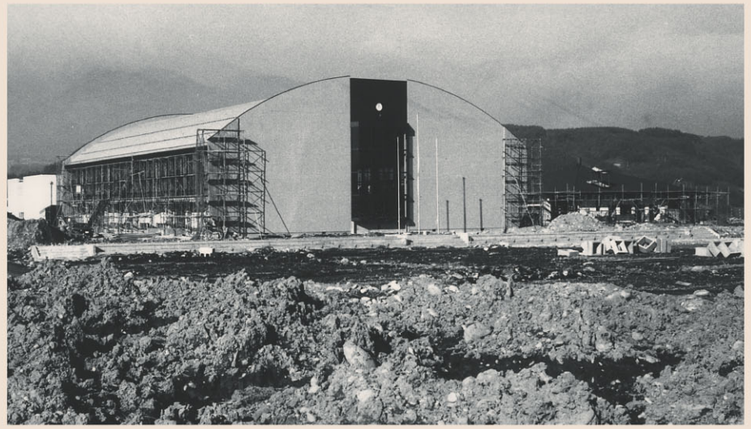
昭和50年代は南向・片桐の融合が名実ともに実現し、更なる発展への礎が築かれた時代であった。昭和51（1976）年に東西中学校を統合した中川中学校が開校。昭和53年には東西を結ぶ牧ヶ原橋が完成した。村営水道や村営住宅等の生活基盤整備もこの時代に一気に進んだ。これと相まって人口の減少化もようやく落ち着きをみせてきた。昭和50年代半ばには5500人台で安定する。

足かけ4年の工事を経て昭和51年4月、中川中学校が開校した。広い施設と近代的な教育設備のもと、7学級245名の生徒たちがここを学び舎にひとつになったのである。これに続いて東西を結ぶ大動脈、牧ヶ原橋が昭和53年11月に竣工した。川面からの高さ42・5メートル、全長137メートルの美しいアーチ橋は村民の心をひとつにつなぎ、村の発展に欠くことのできない役割を果たしてきた。

合併20周年のこの年、村歌・村花・村木が制定された。翌年には幹線道路として沖田牧ヶ原線が開通し、村の東西交通はさらに利便性を増した。

昭和50年代は生活環境関連を中心に主要施設が整備された時期でもある。昭和51年には保養センターとして望岳荘がオープン。同年、牧ヶ原地籍に1期工事として村営住宅が12戸完成し、その後昭和59年には団地数が46戸となる。昭和52年には村営水道が完成・通水し、村内普及率は94％となった。昭和56年には、名称が同じという縁で北海道中川町と姉妹町村提携を結んだ。昭和57年には歴史民俗資料館が完成。昭和58年に大草城址公園造成事業が起工。昭和59年には桑原キャンプ場がオープンした。

村が新しい村づくりの土台と考え一貫して取り組んできたのは、農業基盤整備による農業の近代化であった。その先駆けとなったのが、昭和55年に工事が完了した、1区画30アールを標準とした下島地区のほ場整備事業である。農家数は昭和60年に998戸と初めて1000戸を割り込んだが、逆に生産額は増加傾向にあった。果樹栽培、施設園芸、きのこ栽培など、農業形態の転換が図られた結果といえるだろう。


建設中の中川中学校体育館（昭和49年）

1975……1988

牧ヶ原橋渡り初め（昭和53年）

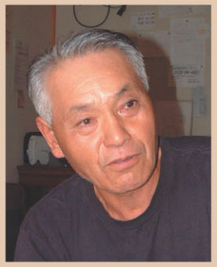
大草城址公園わんぱく広場完成（昭和63年）

北海道中川町と姉妹町村提携調印（昭和56年）

下島地区ほ場整備完了記念碑除幕式（昭和56年）

歴史余話

村がひとつになった牧ヶ原橋の開通


細田一夫さん【下平】

当時は中学校の建設と絡んで、橋の計画決定までには紆余曲折がありました。一部から「橋を造って中学校を牧ヶ原にもっていくとはなにごとか」の声があがり、一方で「中川村は4つも橋があるのにまだ造るのか」と県から言われる始末でした。それでも「村がひとつになるには、南向・片桐の子どもたちがひとつの学校で学ぶことが大事」とする住民の気持ちが勝り、計画決定となりました。

今はみんな当たり前のように通っていますが、当時を知る者としては「本当によくできた」としみじみ感じ入ります。みんな「一生懸命だった。その一生懸命さが道を切り開いていったと思います。（談）